

【抄 録】

『口腔内写真における機材の選択方法と、その設定方法』 小田中 康裕

(東京都歯科技工士会)

- ・口腔内撮影の機材として何を購入していいものなのか判らない。
- ・カメラを購入したは良いが、シェードテイキング時においてカメラの設定が判らない。
- ・または、何となくの撮影で伝わるだろう?!その写真から色は解る筈だ!

上記のことはカメラのことで、いつも聞かれる質問や、聞かれる言葉である。……。

写真とは真実を写すと表記するわけであるが、口腔内撮影においては、考えて撮影しない真実は写らない。ましてや適当に撮影していたら虚像だらけなのである。口腔内撮影において気をつけなければならないのは、如何に客観性を持って他人に伝えることができるのかということである。シェードテイキングの口腔内写真はビジネス手紙と同じようなものと私は考えている。カメラの操作には必ず基準といったものがあり、それを前提として写真を撮り、シェード等の話が進められて行きます。しかし、日本の歯科においては10人の歯科医師がいたら10通りの考えで撮影していると言っても過言ではないぐらい曖昧にカメラ設定を行い撮影していると思うし、それは歯科技工士に関しても同じことが言える。

そこで、

- 1) 口腔内写真を撮影する場合どのような機材が必要なのか?
- 2) どのような設定が必要なのか?
- 3) どのようなファイルサイズが必要なのか?
- 4) シェードガイドはどのような配置で撮影すべきなのか?
- 5) ISO 感度と、F 値、シャッタースピードとの関係。

等 の講演を行う。

上記のことを学ぶことにより歯科医師と歯科技工士の色の伝達等はずまく行くはずである。口腔内写真においても歯科関係者は、発表する機会等のことを考え、如何に上手く撮影するかを考え機材を買え揃えますが、本来の我々の目的は伝えること、記録することである。そのことを踏まえてカメラの選択、設定、考察していただけたらと思う。

【抄 録】

『共存とは何かを考える』

小田中 康裕

(東京都歯科技工士会)

スイス・チューリッヒ、Willi Geller 氏の歯科技工所に行く機会を得た。氏は患者がラボに訪れてくるたびに患者の口腔内を私に常に見せてくれ、とても貴重な体験であった。そこで、私が衝撃を受けたことは、Geller 氏が製作した補綴物は口腔内にとにかく調和しており(どこに補綴物が入ってくるか認識できないほどであった)、歯冠部の表現は当然のことながら、歯頸部の歯肉との調和が特に素晴らしかったということである。当時日本のセラミックスといえば、模型上でいかにリアルなサンプルを製作できるかという方向性で、歯科雑誌もそういう方向性を向いていたかと思う。その時に私は日本の臨床は何かの間違っていると確信した。29歳の2月のことである。

臨床を本格的に始めて20年程が経ち、その間エマーゼンスプロファイルに取り組んできたのであるが、そこには歯肉と補綴物との調和を目指すべく歯科医師：行田克則の唱える「Sシェーププロファイル」を実践してきた。「Sシェーププロファイル」とは、歯科医師が唱える補綴物との調和であり、臨床ケースでは色調も審美においては重要視されるために、歯肉と接する箇所歯頸部の色調が歯肉、臨在歯の歯頸部に調和させなければ自然観は生まれない。

そこで、色調が与える歯頸部の調和としては、適度な透明感と彩度、蛍光性があげられる。日本では蛍光性といえど歯冠部の蛍光性云々が取りざたされることが多いが、一番大切なことは蛍光性によって歯肉部に光が送られて歯肉が健康的に見えるか否かが重要であり、日本の歯科関係者はこのところを認識していないことが多い。また、彩度が低い天然歯の場合には、色調が白いというだけではなく、それとは別な意味での明度が高くなるという傾向がある、(彩度が低い=明度が高いというわけではない。)天然歯は独特の明度の高さからシェードガイドの色調と比べて力強さがあり、それと相反するようであるが透明感を持ち合わせているという困った性質を兼ね備えている。そのような傾向の色調再現の場合には歯頸部の色調の調和が特に取りにくいことが多いのである。

上記のことから形態と色調が融合した時に口腔内では共存関係が生まれてくる。そこで私の臨床経験からどのようにすれば、共存が得られるかを説明できればと思う。